

小学校におけるキャリア教育の現状と課題 —実践からの示唆—

浅野信彦*・伊藤友美**

The Present Condition and a Subject of Career Education in the Elementary School: Suggestion from Practice

Nobuhiko ASANO, Yumi ITO

要旨 本研究の目的は、小学校におけるキャリア教育の現状とその課題を明らかにした上で、これを効果的に実践するための方法を検討することにある。小学校でキャリア教育を行う場合、その目標を達成した児童の姿を教師がイメージしにくいいため、実践が行われる教科や領域に偏りがみられる。そこで本研究では、ある小学校で筆者が考案したキャリア教育のプログラムを約1ヶ月実践し、その間の児童の変化から、子どもたちがキャリア発達に関する能力を身につけていく姿を具体化した。すなわち、児童がキャリア発達を遂げていく姿は「かかわろうとする態度」を高めていく姿として捉えることができた。今後は、①児童が親しみをもてる環境設定、②児童が達成感をもてる活動、③教師が児童に成長を伝える、④様々なできごとを振り返る、⑤活動は単純明快に行う、⑥気持ちを心の外に出す活動を行う、⑦教師が手本になる、などに留意して、実践をすすめていく必要がある。

キーワード：小学校 キャリア教育 日常性 情報活用能力 将来設計能力

1. 問題の設定

本研究の目的は、小学校におけるキャリア教育の現状とその課題を明らかにした上で、これを効果的に実践するための方法を検討することにある。

キャリア教育という言葉は1999年の中教審答申ではじめて用いられた¹⁾。2004年には、キャリア教育に関する総合調査協力者会議で「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と定義された²⁾。これを受けて、2006年、文部科学省は『小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き』（以下『手引き』と略記）を発表した。そのなかで、キャリア教育で育成すべき具体的能力が「人間関係形成能力」「将来設計能力」「情報活用能力」「意思決定能力」として明確化されてい

る³⁾。加えて、改正教育基本法でも「職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと」とその重要性が明記され、2008年に改訂された小学校学習指導要領でも、教科を横断して取り組むべき事項の一つにキャリア教育があげられている。

これまで、多くの場合、人生における選択は進学や就職を契機に「迫られる」ものであった。そのため、こうした教育は中学校や高等学校で進路指導として行われてきた。しかし、キャリア教育を推進する一連の動きのなかで強調されているのは、青年期のキャリア教育をより充実させるためにも、その前段階である児童期から自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てることの重要性である。

小学校でキャリア教育を実践する際には、児童期の発達段階に即した内容や方法で行うことが必要である。例えば、埼玉県では、中学校のキャリア教育の目標が「社会への参加」であるのに対し

*あさの のぶひこ 文教大学教育学部心理教育課程

**いとう ゆみ 和光市立新倉小学校

て、小学校では「社会とのかかわり」になっている。学校の教育活動全体を通して、児童が自分と社会（周りの環境や人々）とのかかわりを感じ、職業に直結せずとも、なりたい自分を思い描くことが目指されている⁴⁾。

その一方で、先進校が発表した実践事例をみると、そのほとんどは、限定された教科や領域（総合的な学習、道徳、社会科が多い）のなかで完結する特別授業という印象を受ける。こうした授業以外に日常的にキャリア教育を行っているのかどうか、はっきりしない。キャリア教育は学校の教育活動全体をとおして行うことが前提とされているにもかかわらず、である。学習の振り返り、学習のきまり、元気なあいさつや返事などに言及している実践報告も、これに関する教師の意図やその結果までは把握されていない。筆者は、キャリア教育ほど「繰り返し」や「継続」が求められる教育活動はないと考える。なぜ多くの先進校では日常的な実践が重視されないのだろうか。

先述した『手引き』には、「キャリア発達を促すために育成することが期待される能力」が示されている。「自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する」「自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え選んで取り組む」などである。しかし、これらはどれも漠然としている。教師は国語の授業を行う際、児童の到達度を確認するための指標をもっている。これに対して、キャリア発達にかかわる上記の能力を目標に掲げて教育活動を行った場合、教師は児童のどのような行動や態度からその目標を達成できたか否かを判断すればよいのか、はっきりしない。このことは、教師がその能力を身につけた子どもの姿をイメージできないことを意味する。ここに、先進校の実践の教科や領域が偏っている原因があるのではないだろうか。逆に言えば、キャリア発達の側面からみた児童の成長の姿がイメージできるようになれば、もっと幅広い教科や領域で日常的にこれに取り組むことができるようになる可能性がある。

そこで本研究では、ある小学校で筆者が考案し

たキャリア教育のプログラムを約1ヶ月実践し、その間の児童の変化を把握することによって、子どもたちがキャリア発達に関する能力を身につけていく姿を具体化することを目的とする。

上記の目的を達成するため、まず、どのような背景からキャリア教育が登場し、それが何を指しているのかを整理する。次に、その結果を踏まえて筆者が考案したプログラムを実践し、児童の変化を把握する。最後に、実践の結果から、今後小学校でキャリア教育をすすめていくための示唆を導き出すこととしたい。

2. キャリア教育の背景とその目標

(1) キャリア教育の背景

2008年1月の中教審答申は、教育内容の改善事項とりわけ社会の変化への対応の観点からキャリア教育の必要性を強調している⁵⁾。ここに至るまでの経緯は表1のように整理することができる。

表1 キャリア教育導入の経緯

1999年 12月	中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」に、はじめてキャリア教育という言葉が登場。小中高の接続に「教育と勤労」という視点を導入。小学校からのキャリア教育の可能性を議論。
2003年 6月	若者自立挑戦戦略会議によって「若者自立・挑戦プラン」が取りまとめられ、キャリア教育の推進が位置づけられる。
2004年 1月	協力者会議が『キャリア教育の推進に関する総合調査研究協力者会議報告書』を発表。キャリア教育を正式に定義。
2004年 12月	若者自立挑戦戦略会議によって『若者の自立・挑戦アクションプラン』が取りまとめられ、キャリア教育の充実が促される。
2004年度	キャリア教育の指導方法・指導内容の開発を行う「キャリア教育推進地域指定事業」を文部科学省が実施する。
2005年度	地域の教育力を活用した、職場体験等の調査研究を行う「キャリア教育実践プロジェクト」を文部科学省が実施する。
2006年 11月	2004年1月の報告書をわかりやすく説明。学校に取り入れやすくする目的で『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引き』を文部科学省が提示。11月をキャリアスタートウィーク推進月間とする。
2006年 12月	教育基本法改正。2条「教育の目標」に「...職業及び生活との関係を重視し勤労を重んずる態度を養うこと」と示される。
2008年 1月	中教審答申「教育内容の改善事項－社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項－」にキャリア教育が示される。

(2) キャリア教育の定義と目標

『手引き』では、キャリア教育は次のように定義されている⁶⁾。

キャリア教育とは、

「キャリア概念」に基づいて、「児童一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成してゆくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」。端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」

キャリアとは、

個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係づけや価値付けの累積

さらに、次のようにも言い換えられる。

個人がその学校生活、職業生活、家庭生活、市民生活等のすべての生活の中で経験する立場や役割を遂行する活動

キャリア発達とは、

発達とは生涯にわたる変化の過程であり、人が環境に適応する能力を獲得していく過程である。その中で、キャリア発達とは、自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方と統合していく過程である。

人は生涯のそれぞれの時期において、社会との相互関係の中で自分らしく生きようとする。そして、各時期にふさわしい個別的なキャリア発達の課題を達成していくことが、生涯を通じてのキャリア発達となる。

以上の定義をまとめると、「社会とのかかわりの中で自分らしく生きる力」を育てることがキャリア教育であるということが出来る。キャリア発達の大きな節目となるのが「就職」である。それは、自分で選択し、切り開きながら社会との相互関係を築くことだからである。この段階で、人は社会と「勤労」という相互関係をもつようになる。学校や家庭での生活をとおして子どもたちにそのための力を育むことがキャリア教育の意義である。キャリア教育は、「生きる力」の中でも特に「社会

表2 キャリア発達にかかわる諸能力

領域	領域説明	能力説明
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	【自他の理解能力】 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力
		【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。	【情報収集・探索能力】 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力
		【職業理解能力】 様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことなどを理解していく能力
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	【役割把握・認識能力】 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力
		【計画実行能力】 目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力
意思決定能力	自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	【選択能力】 様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力
		【課題解決能力】 意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力

的に生きる」ことに力点をおいた理念として注目されているわけである。

キャリア教育の最終的な目的は、

子どもたちが「生きる力」を身につけ、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な問題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるようにする

ことである。この目的を達成するために必要な能力や態度、資質として、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意志決定能力」の4つが示された。表2（前頁）は、4つの能力とそれぞれの2つの下位能力の内容を例示したものである⁷⁾。

（3）小学校の位置づけ

先述したように、「就職」は生涯のキャリア発達の一部である。各成長段階で身につけた能力や態度の積み重ねがあつてこそ、進路選択を適切に行い、自立した個人として生きてゆくことができる。したがって、キャリア教育は、小・中・高を通して取り組む必要がある。小学校のキャリア教育はその最初の段階であるということが出来る。社会的自立を見据えたキャリア教育を小学校でも実施していくことが求められる。

そのためには、2つの点に留意する必要がある。一つは小・中・高等学校を通じた系統性を確保することであり、もう一つは、児童生徒の発達段階に即して実施するということである。『手引き』では、この2つについて以下のように述べている⁸⁾。系統性については、

小学校・中学校・高等学校において、キャリア教育を理解し、進めていくためには、児童生徒のキャリア発達を支援するという観点に立って、各領域の関連する諸活動を体系化し、計画的・組織的に実施することができるよう、各学校が連携を図りつつ、教育課程の在り方を見直していく必要がある。

発達段階については、

キャリア教育は、子どもたちがそれぞれの発達段階に応じて、自己と働くことを適切に関係づけ、各発達段階における発達課題を達成できるように取り組みを展開するところにその特質がある。

こうした観点から、『手引き』では、各学校段階の課題をキャリア発達の側面から次のように捉え直している。すなわち、小学校は「進路の探索・選択にかかわる基盤形成の時期」、中学校は「現実的探索と暫定的選択の時期」、高等学校は「現実的探索・試行と社会的移行準備の時期」である。

このなかで、特に小学校段階で達成することが期待される課題として、「自己及び他者への積極的・肯定的関心の形成・発展」「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」「夢や希望、憧れる自己イメージの獲得」「勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成」があげられている。

以上のようなキャリア発達の定義とキャリア教育の目標にもとづいて、国立教育政策研究所生徒指導研究センターは、各段階で身につけることが期待される能力を系統的に整理している。そのうち、小学校段階を抜粋したものが表3（次頁）である⁹⁾。

小学校のキャリア教育は、上記のような教育的な意図にもとづき、児童一人一人の発達に応じて、人、社会、自然、文化とかかわる体験活動を身近なところから徐々に広げ丁寧に設定していく教育活動である。そこには当然、キャリア教育にかかわる目標を設定した特別授業を実践するということも含まれる。しかし、『手引き』に「係活動や委員会活動、清掃活動等を通して、自らの役割を果たそうとする意欲や態度を育む」ことが例示されているように、特別な授業も、そうした日常的な教育活動の基盤があつてはじめて十分な効果を上げうることを指摘しなければならない。

3. 小学校における実践例と課題

（1）実践例の分析

ここまでで、小学校におけるキャリア教育は、

小・中・高等学校の系統性を確保しつつ、児童の発達段階に即して計画され、実践される必要があることが明らかになった。それでは、小学校で行われているキャリア教育の実態はどうなっているのだろうか。いくつかの実践例を取り上げてみたい。

以下、①活動名、②教科・領域、③学年、④特徴、⑤ねらい、の順に示す。

実践例 1 佐賀県教育センター

- ①「役割を果たすことをもっとやってみよう」
- ②学級活動
- ③5年生
- ④平成19・20年度のプロジェクト研究として、5年生を送る会に向けて実施。
- ⑤役割把握・認識能力「役割の大切さが分かる」
 - ・社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる
 - ・仕事における役割の関連性や変化に気づく問題解決能力（課題を見つけ解決しようとする）

・将来の夢や希望をもち、今しなければならぬことを考える

実践例 2 岡山県備前市立片上小学校

- ①「わたしのまちみんなのまち」
- ②社会科
- ③3年生
- ④平成18年7月実施、単元計画でキャリア教育を取り入れている
- ⑤情報活用能力の「情報収集・探索能力」
 - ・探検して分からなかったことを館長さんに質問して話を聞くことにより、市民センターの様子やはたらきを聞き取ろうとする
 - 情報活用能力の「職業理解能力」
 - ・働いている人の工夫や苦勞を聞くことで、仕事に対して理解し、働く喜びを感じ取ることができる。

実践例 3 千葉市立本町小学校

- ①「ぼうけん、発見、町たんけん」
- ②社会科を中心
- ③3年生
- ④単元計画でキャリア教育を取り入れている。社

表 3 職業観勤労観をはぐくむ学習プログラムの枠組み（小学校のみ抜粋）

	低学年	中学年	高学年
	学校への適応	友達づくり／集団の結束力づくり	集団の中での役割の自覚／中学校への心の準備
人間関係形成能力	<ul style="list-style-type: none"> ●あいさつや返事をする。 ●友達と仲良く遊び、助け合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ●自分のよいところを見つけるとともに、友達のよいところを認め励まし合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ●自分の長所や短所に気づき、自分らしさを発揮する。 ●異年齢集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。
情報活用能力	<ul style="list-style-type: none"> ●身近で働く人々の様子が分かり、興味・関心をもつ。 ●係や当番の活動に取り組み、それらの大切さが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●いろいろな職業や生き方が分かる。 ●係や当番活動に積極的にかかわり、働くことの楽しさが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●身近な産業・職業の様子やその変化が分かる。 ●自分に必要な情報を探す。 ●施設・職場見学を通し、働くことの大切さや苦勞が分かる。 ●学んだり体験したこと、生活や職業との関連を考える。
将来設計能力	<ul style="list-style-type: none"> ●家の手伝いや割り当てられた仕事・役割の必要性が分かる。 ●作業の準備や片付けをする。 ●決められた時間やきまりを守ろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●互いの役割や役割分担の必要性がわかる。 ●日常の生活や学習と将来の生き方との関係に気づく。 ●将来の夢や希望を持つ。 ●計画づくりの必要性に気づき、作業の手順が分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる。 ●仕事における役割の関連性や変化に気づく。 ●憧れとする職業をもち、今しなければならぬことを考える。
意思決定能力	<ul style="list-style-type: none"> ●自分の好きなもの、大切なものをもつ。 ●自分のことは自分で行おうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む。 ●自分の仕事に対して責任を感じ、最後までやり通そうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●自分の仕事に対して責任を持ち、見つけた課題を自分の力で解決しようとする。 ●将来の夢や希望を持ち、実現を目指して努力しようとする。

会科を中心とし、道徳・国語も組み込む

⑤人間関係形成能力

- ・自分の生活を支えている身の回りの人に感謝する（自他の理解力）
- ・自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する（コミュニケーション能力）
- ・友達と協力して学習や活動に取り組む（同上）

情報活用能力

- ・いろいろな職業があることがわかる（情報収集・探索・実践能力）
- ・わからないことを多様な方法で調べ、正確な情報の収集ができる（同上）

将来設計能力

- ・互いの役割や役割分担の必要性が分かる。（役割把握・認識能力）
- ・計画を立てることの必要性に気づき、作業の手順が分かる（計画実行能力）

意思決定力

- ・自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、すすんで取り組む（自己管理・選択能力）
- ・自分の力で課題を解決しようと努力する（課題解決能力）

このように実践例を集約していくと、現在のキャリア教育には2つの傾向があることがわかる。第1に、キャリア教育推進テキストを作成している自治体や学校教育目標にキャリア教育を取り入れている学校がとても多いことである。4つの能力を「えがく力」「かかわる力」「もとめる力」というように、運営方針にあわせて言い換えている自治体や学校もある。このように、組織的・計画的に取り組んでいる傾向が一つである。第2の傾向として、実践を行っている教科や領域に偏りが見られることである。社会科、生活科、総合的な時間や道徳が圧倒的に多く、逆に、算数や理科の実践例は少ない。

これまで述べてきたように、キャリア発達には児童が行う全ての活動が影響するため、キャリア

教育は学校の教育活動全体を通して行われるべきである。「夢や目標に向かって主体的に行動する」という生き方の習慣化を図るため、継続性に重点をおいた改善ができないだろうか。

継続性という観点から見れば、多くの実践例で一回限りという活動はほとんどない。例えば、沼津市立原東小学校は3年間の実践を記録して出版している¹⁰⁾。同校では総合的な学習の時間を軸にキャリア教育を実施し、各学年の年間計画を立てている。他教科とのかかわりも示されている。この実践にもある意味での「継続性」が見られる。このように、社会科や総合的な学習の時間などの軸を設定することは確かに有効であろう。しかし、軸となる領域での活動をより充実させるためにも全教育活動での取り組みが大切なのである。一方、この実践にも教科の偏りは存在している。例えば、国語科では人間関係形成能力が、社会科では情報活用能力が目標とされることが多い。

原東小がキャリア教育を推進した出発点は「総合的な学習の充実」にあった。本文中に「総合的な学習の時間にキャリア教育の要素を取り入れることは、この時間のねらい達成のために有効である」と述べられている。確かに、学習指導要領に示されている「総合的な学習の時間」のねらいは、「社会との関わりの中で自分らしく生きる力を育てる」とあり、キャリア教育の目標と重なる点が多い。他にも、国語の「伝え合う力を高める」という目標は人間関係形成能力と結びつく。そして、目標や内容から、社会科とキャリア教育が深く関連することが推察され、キャリア教育の題材も豊富であることから、実践例が多くなることも納得できる。一方で、実践例が少ない算数や理科は、学習指導要領で示されている目標や内容とキャリア教育で育むことが目指されている能力とが直接結びつきにくい。

(2) キャリア発達を捉える視点の必要性

以上のように、現在実践されているキャリア教育には偏りがある。その原因は、キャリア教育のねらいを学習指導要領上の目標や内容と結びつけ

ることができる程度が、教科や領域によって異なるからである。しかし、そうであっても、児童のキャリアが全教育活動をとおして発達することもまた事実である。先進校の事例から、一見キャリア教育との結びつきが小さいように思われる算数や理科、さらには朝の会や掃除の時間等の日常的な活動をとおして起こる児童のキャリア発達は、キャリア教育の対象とはなっていないことが読み取れる。

『手引き』には、キャリア教育推進の手順が示されている。その最初は「キャリア教育の視点を踏まえて、育てたい児童像を明確にする」ことである。学校教育の本質は、教師に育てたい児童像があり、それを意図して児童に働きかけることにある。しかし、教師が意図しなくても児童が成長することはある。そうした多様な児童の成長の姿を見通して、目標を立て、内容や方法を改善していくことが教師の役割である。そうした幅広い児童の発達まで視野に入れ、教科の枠にとらわれず、全教育活動を通じて継続性のあるキャリア教育のプログラムを考案する必要がある。

なぜ、特定の教科や領域以外でキャリア教育の視点を取り入れることが難しいのだろうか。それは、キャリア発達の過程で児童はどのような姿を見せるのか、そのイメージを教師が抱きにくいからである。児童が教科内容を身につけたかは授業中の発言や感想、テストで判断できる。教師にとっては評価のポイントが明確である。しかし、『手引き』に示されているキャリア発達にかかわる能力は抽象的である。そのため、教師にとって、算数や掃除の時間に生じる児童のキャリア発達の姿はイメージしにくい。これに対して、社会科の場合、社会科で学力を身につけた姿とキャリア発達の姿が近似しているため、目指す児童像がイメージしやすいと考えられる。ここで、次のような仮説を設定することができる。すなわち、キャリア発達に関する能力を身につけた児童の姿を具体的に描くことができれば、教師はどの教科や領域でもキャリア教育のねらいをもつことができ、その

視点から児童のキャリア発達を促すために働きかけることができる、ということである。

この仮説にもとづき、ある小学校で筆者が考案したキャリア教育のプログラムを実践する。これを通してみられた児童の変化から、キャリア発達を遂げていく児童の姿を具体的に捉えてみたい。

4. 「うれしくなるカード」の実践

(1) 実践の目的

今回の実践では、「将来設計能力」と「情報活用能力」に焦点をあてる。それはキャリア発達に関する4つの能力が図のような構造になっているからである¹¹⁾。

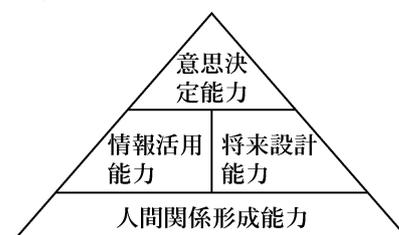


図 キャリア発達に関する能力の構造

土台となる「人間関係形成能力」や実際の行動につながる「意思決定能力」は今回の実践で達成度を確認するのは難しいと判断した。しかし、中間の「情報活用能力」と「将来設計能力」なら、実践による変化が捉えやすい。これらは道徳や総合的な学習の中で目標とされることが多いが、日常生活では刺激されにくい能力である。日常的にこれらの能力を育成するための実践を考案した。

(2) 対象

埼玉県内の公立N小学校3年2組（男子18名、女子19名、計37名）で実施した。校長先生に研究の目的を説明し実践の許可を得た。学年の選択にあたっては、児童自身が活動の意味を理解できること、実践結果を小学校全体に活かすことができることを条件とし、学校側と相談した結果、筆者の希望を踏まえて1年生と6年生の間である3年生で実践させてもらうことになった。

(3) 期間

2008年11月25日に児童に自己紹介をし、3回目の

12月1日に実践の導入と最初の活動を行った。それから毎週月曜日と木曜日に活動を行い、終業式の24日にまとめを行った。活動回数は全7回。それ以外の日も次回の活動に向けて周りを意識し、活動日に何日間かを振り返るなどした。「継続」をねらいにしているため、期間は約3週間である。

(4) 方法

筆者が作成した「うれしくなるカード」の記入をとおして、児童に自分自身や周囲の人々、日々の生活について、意識的に回想し、前向きに考えさせる。カードはハガキサイズで、最近見つけた「よかったこと」を2つ記入する。「うれしくなるカード」という名称は、児童に「よかった」を探す動機づけを図るためにつけた。友達の言動、草花や天気、自分の気持ちなど、日常の何気ない生活のなかで「よかった」を見つけ出す力を育みたい。悲しかったことや苦しかったことも「よかった」と思える前向きな捉え方を身につけさせたい。小学校中学年で育成すべき情報活用能力は、「いろいろな職業があることが分かる。係や当番活動に積極的にかかわり、働くことの楽しさが分かる」、将来設計能力は「日常生活や学習と将来の生き方との関係に気づく。将来の夢や希望をもつ」等があげられている。これらの能力を日常的な活動の中で育成するため、実践の目標を、①「自分のことや周囲のできごとに気をとめる」(情報活用能力)、②「自分の日常を前向きに捉える」(将来設計能力)と設定した。求める児童像は「毎日を楽しく生きる児童」とした。

カードには、日付と氏名と「よかった」を2つ記入させる。児童が親しみやすく自由に色塗りを楽しめるようにデザインを工夫した。カードの一番下には筆者がコメントを記入する欄を設けた。カードは毎回、1人1枚書いてもらい、書き終わったカードを帰りの会までに「よかったポスト」に入れてもらった。これを放課後に回収した。

前回のカードに筆者がコメントを入れ、次回の活動時に返却する。時間があれば、何人かの児童にどんな「よかった」を書いたか発表させる。時

間がない場合は、筆者が「こんな『よかった』を書いてくれた子がいたよ」というように、振り返りを促す話をした。

(5) 実践に対する考察

フィールドノートから、実践をとおして見られた児童の姿に対する考察を抜粋する。

第1回 12月1日(月)

全員がカードをポストに入れてくれた。記入する時間がしっかり確保されていたため、色塗りを丁寧にした。余白に絵を描いてくれた子もいた。コメントだけではなく、カードを書いている児童への声かけも大切だと思った。友達にサインをもらいに行けなかった子や、「よかった」を1つも見つけられない子、それぞれ情報活用能力と将来設計能力に課題があるのでないだろうか。次回の指導を工夫していきたい。

第2回 12月4日(木)

第2回では、初回で「よかった」を見つけられなかった児童4人が、2つずつ「よかった」を見つけたことができた。以下がその内容である。

「絵を上手だと言われてよかった」「今日元気でよかった。だってきのうぐあいが変わったから」「妹がいてよかった。かわいいから」「今日きゅう食で僕の大好きなサラダバーが出てよかった」。

どんなことを書けばいいか悩めたようで、微笑ましい「よかった」を書いてくれた。

ポストに出す前に「こんな書きちゃった」と見せに来る子もいる。カードに愛着を持ち始めたのだろうか。この日は体育でシャトルランを行ったため、その記録更新を「よかった」と書く子が多かった。持久走大会や縄跳びチャンピオンも近づいているため、その内容のものも多い。

第3回 12月8日(月)

児童が慣れてきたように感じる。“毎回文字も色塗りも丁寧にする子”，“素っ気ない感じがあっても悪意はなく，シンプルを好む子”，“達成できたことに喜びを感じる子”等，児童の個性が私にも見えてきた。コメントに返事を書いてくれる児童もいる。前回の自分を越えたいと，次々とスケールが大きくなる児童もいる（「生きててよかった」「人間でよかった」など）。

しかし，今回は4人の児童が「よかった」を見つけられなかった。以前より「よかった探し」への意欲が低下しているように思える。そのような児童には「〇〇君が8ピンゴもしてくれてよかった」「〇〇君の楽しい気持ちが伝わってきたよ」などのコメントを入れた。

第4回 12月11日(木)

午前中の校外での見学で子どもたちの気持ちが高ぶっていたこと，カードを熱心書いてくれることへのうれしさから，私が授業の切り替えを曖昧にしまったことが原因で，5時間目の授業が大幅に減ってしまった。そして子どもたちが担任の先生に怒られることになった。時間を考えて行動できなかった原因は私の環境設定不足にある。学級の時間を奪ってしまったことと児童に不快な思いをさせたことを反省した。授業への支障が出ては本末転倒だ。「よかった探し」に重点をおくこと，カード配布後は，授業への心の準備をしっかりさせることを常に念頭におこう。

第5回 12月15日(月)

子どもたちにマイナスのできごとを前向きに捉える力，マイナスなことがあっても学校や家庭，習い事等，自分の生活のなかで様々な「よかった」を探せる力がついてきている。さらに，その日の児童の気持ちを知るのにもカードが役立つことがわかった。児童の個性を知ることにはもちろんだが，一人ひとりに普段の様子とは

違う変化があったとき，気づけるようになった。いつも丁寧に書く子が小さな字で荒く書く。いつも殴り書きの子が丁寧に書く等である。子どもたちは心から残念だったことはカードには表さない。しかし，カードを見れば心の変化があったことが分かるのだ。

第6回 12月18日(木)

大半の児童のよかった探しが上達してきたが，カードについていけなくなりつつある女子児童もいる。それでもカードを出し続けてくれている。その子の様子や話した内容から，私が「よかった」を書いたり，「つづきも書いてみよう」とコメントするなどしている。児童に成長の違いが存在することは予想していたが，そういう子が劣等感を持たずに自分なりのペースで活動を続けていくには，今後の改善が必要だ。

第7回 12月22日(月)

最後の「うれしくなるカード」ということで，気合いを入れて書いてくれた児童が多かった。2回連続で提出しなかった子も，こちらの意気込みが伝わったのか，記入して出してくれた。今回は学校での「よかった」は少なめだったが，長く欠席していた友達や転校する友達に気持ちを寄せる「よかった」も見られ，うれしく思った。

最終回 12月24日(火)

コメントの仕上げと個別の綴じ込みを作成し，「うれしくなるカード」を児童に返却した。この研究は児童の協力がなければできなかったとしみじみ思い，子どもたちに記念を残したいと考え，プレゼントをつくった。しかし，彼らが最もよろこんだのは，プレゼントを渡された時ではなく，自分たちが書きためたカードの厚みを見たときだった。子どもたちの中に活動のよろこびはしっかりと残っていた。自分の稚拙さを反省するとともに，大きな感動を児童にもらった。

この学級では、帰りの会で毎回「今日のMVP」を発表している。その日の友達のがよかったところを挙手して述べ、MVPに推薦するのである。そのため1日の生活を振り返ることに慣れており、「うれしくなるカード」も比較的スムーズに始めることができた。一貫して「遊んでよかった」という「よかった」は登場していたが、当初は抽象的な書き方が多かった。次第に「誰と」「何で」遊んだかまで書ける子が増えていった。3, 4回頃になるとカードを心待ちにする児童も多く見られるようになった。中盤、「よかった探し」が軽視される傾向や、カードを満足に仕上げたい意欲が原因で提出率の低下が見られた。カードを連続して出さない児童や、ついてこれなくなる児童も現れた。終盤は、カードの内容の改善や、筆者の働きかけの継続により活動は持ち直し、学校生活のできごとを細かく思い出せる児童も増えた。また、習い事や家族など学校外での「よかった」も見つけることができるようになった。

この実践から見出される児童のキャリア発達の姿とは、「かかわろうとする態度」を高めていく姿である。『手引き』によれば、情報活用能力には「係や当番活動に積極的にかかわり、働くことの楽しさが分かる」ことが含まれる。また、将来設計能力には「日常の生活や学習と将来の生き方との関係に気づく。将来の夢や希望をもつ」ことが含まれる。筆者は、これら全ての基盤が「かかわろうとする態度」であると考える。

「よかった」と捉えるだけで、物事にかかわることになる。「今日は晴れた」ではなく「今日は晴れてよかった」と自分の感情を入れるだけで、自分と天気がかかわりをもつ。友達と自分、家族と自分、当番と自分、学ぶことと自分。それらに自分がかかわっていかうとする態度が、やがて「社会と自分」の関係へと発展していくのではないか。

5. 今後の実践への示唆

「うれしくなるカード」の実践結果から、キャリア発達にかかわる能力を身につけた児童の姿を

「かかわろうとする態度」を高めていく姿として捉え直すことができた。では、こうした児童を育成するためには、どのようなキャリア教育を行っていけばよいのだろうか。以下、若干の示唆を導き出したい。

①児童が活動に親しみをもてる環境設定を行う

今回の実践ではカードに工夫を施し活動に親しみをもてるように心がけた。これを各教科や領域にも応用し、例えば算数の問題に子どもたちの生活によく出てくる場面を想定するなど、知識の有意さを実感させることが大切である。

②児童が達成感を実感できるようにする

今回の実践で児童が最も満足した表情を見せたのは、書きためたカードの厚みを見たときだった。継続は達成感を生む。達成感を味わう活動を日常の教育活動に取り入れれば、児童のかかわろうとする意欲を引き出すことができると考えられる。

③教師が児童によさや成長を伝える

教師が児童をよく観察し、成長した姿に気づくことは大切である。しかし、もっと重要なのは、それを児童本人に伝えることである。直接言葉をかける、コメントを書く等、方法はいろいろあるだろう。自分が達成感を感じつつあるときに認められることが、前向きに物事を捉える基盤となる。児童の成長を教師が心の中で嘯みしめるのではなく、学級全体で認めていくことが大切である。

④様々なできごとを振り返る

自分の感じたできごとをしっかりと思い起こせるようになることが児童の成長のために必要である。小学校の一日はあわただしい。帰りの会や週末に「今日はこんなことがあったね、みんなはどう思ったかな？」などと、振り返りを促すだけでも、子どもたちは身の回りのできごとを関連づけようと思いをめぐらすことができるようになる。

⑤活動は単純明快に行う

日常的な活動を行う場合、単純明快な活動でないと、児童は意欲を持って取り組めなくなる。教師も作業に追われて子どもたちの変化を見逃してしまう。単調な活動でも楽しんで取り組めるよう

に、ちょっとした新しさや変化を加えながら活動を続けることが大切である。

⑥気持ちを心の外に出す活動を行う

今回の実践では「書く」ことの意味を実感した。

「言う」ことも同じであるが、自分の気持ちを心の外に出すことが大切である。「楽しい」と感じていても、文字や声にしてはじめて気づくことや実感することがある。ある児童が「学校のじゅぎょうがたのしくてよかった」と書いた。これが「よかった」を探しに探して、絞り出した言葉だったとしても、その感情が少しもその子の中になかったら、このようなことは書かないだろう。文字にすることで「自分は学校が楽しいんだな」とその子が感じられたら、それはとても意味のあることである。各教科や領域でも、気持ちを書いたり発表する機会を多く設けることが重要である。

⑦教師が手本になる

教師自身が「かかわろうとする態度」をもつことが大切である。教師が直接働きかけをしない場合でも、教師がつくる学級の雰囲気には児童は感化される。児童にばかり「よかった」を探させていては説得力がない。人間のキャリア発達は一生つづいていく。教師も自らのキャリア発達に関する能力を高めていかなければならない。

【注】

- 1) 中央教育審議会『初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）』1999年12月。
- 2) 『キャリア教育の推進に関する総合調査研究協力者会議報告書』2004年1月。
- 3) 文部科学省『小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き』2006年、3頁。
- 4) 埼玉県教育委員会『埼玉県キャリア教育推進テキスト』2007年、3頁。
- 5) 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）』2008年1月。
- 6) 文部科学省、前掲書、3-4頁。
- 7) 国立教育政策研究所『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について』2002年、4頁。
- 8) 文部科学省、前掲書、19-20頁。

- 9) 国立教育政策研究所、前掲書、30頁。
- 10) 沼津市立原東小学校・三村隆男編『キャリア教育が小学校を変える！』実業之日本社、2005年。
- 11) 埼玉県教育委員会、前掲書、1頁。